

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

問われるストリート・エスノグラフィーの方法：
都市の無意識を歩く作法：アレゴリーの力：
ストリートからみる都市の無意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001228

ストリートからみる都市の無意識

南 博文

九州大学

ストリートとはどのような場所であるのか、それが人間と相互に交渉しあう様式はどのようなものであるのかについて、広島市の再開発の事例、アジア都市での屋台のフィールドワーク、そして9/11後のニューヨーク市における筆者の分析的体験および遊歩の実践事例を報告し、環境心理学と深層心理学とを融合する「都市の精神分析」の立場からストリートに潜む「都市の無意識」を顕在化する仕方について考察した。ベンヤミンの「遊歩」の概念は、このような試みにおいて、都市との分析的セッションを導く方法論の1つとして位置づけられ、環境の無意識が遊歩者の無意識と「出会い」、例えば写真という形で射影される都市による自らのプレゼンテーション（自己提示）であると捉えられた。これは、都市のみる夢の形象化の一端であると考えられ、ここから都市の無意識に接近する経路が得られ、それらは全体としては自由連想の方法論の一環として理論化された。このような分析によって捉えられたヒロシマは、平和公園という空間のデザインにおいて、それ以前の都市の生活世界を抑圧しており、その土地における記憶は、replaceされdisplaceされたものと解釈される。

1 前史

2 アジア都市研究

3 都市の精神分析

4 まとめ

質疑応答

付記

キーワード：都市／環境の無意識、深層空間、ストリート／路地、精神分析、小さな社会的な場、都市の見る夢、遊歩

1 前 史

屋台のことをストリートとの絡みで話すということだったが、子ども時代に広島で育ったことから、自分にとっての原点である広島市とその都市の経験をまず話したい。父は映写技師をやっていて、遊び場はちいさな映画館の映写室であった。そのすぐ前にラーメンの屋台があった。屋台は昭和30年代から40年代にかけて全国各地にあったけれど、40年代から50年代になくなって、ふたたび復活した。それにはわけがあり、都市のあり方を考えるときに別の視点を提供してくれると考えた。屋台をノスタルジーとして見るのではなく、東南アジアでみるような、都市の空間構成のストラテジーと見なすことができるのではないか。しかしまだ報告するほどの成果になっていない。また、今日フィールドワーク（以下FW）ということばを使うが、わたしが現在所属する部署と今回の基礎となる調査研究は建築系との共同作業ということもあり、人類学的に言う

FWとは期間や方法的な側面での違いがある。その差異ゆえに今日は呼ばれたのであろうと思っている。屋台的空間、屋台的世界をどのように理解できるのか、それなりにわかることはあると思う。

私が所属する研究チームは、九州大学の「リサーチコア・アジア都市研究」チームで、アジア的都市要素をアジアの都市のフィールドからみていくという狙いの研究グループである。私自身は、この15、6年にわたって都市の再開発にかかわるなかで、今回の主題である道の問題は「ストリート・ソーシャル・エコロジー」であり、道で人が引き起こす、小さな社会的な場と呼ぶ、それをなるべくそのままに見ていこうとする研究を行っている。最初に広島市でやっていたことをみていきたい。RCCというローカル局のカメラマンと町に入った。

(RCCテレビのニュース番組を挿入：「年寄りの居住環境調査について」……広島市段原町での再開発の後のまつりの様子、年寄りを見かけなくなる、世代交代ということばを使うようになってきているなどのコメント、その中で大学の研究グループとして再開発が年寄りの心にどう影響を及ぼしているのかの調査をしている。便利の良さは考えられているが、そういうところに済むのが年寄りにとって幸せなことなのか疑問。再開発で人口の3分の1が引越した。いっぽう小さな個人商店が姿を消し、新しいビルがたち、町外へ出ていた若者が帰ってきた。「年寄りの居場所のない町」というのが筆者の印象であり、その現場の中での高齢化社会での町作りのポイントをさがす。1991年の放映)

再開発が終了して、現在、違和感なく、古い町があった印象もなくなって大通りをぬけていけるようになってきている。新しい都市の概観、1Rマンションの増加、そういうところになっている。心理学科にいたのもあって、人間側から当時はみていた。九州大学で都市計画の当事者の側にならべてみて、それまでは再開発は問題だという立場だったが、立場が変わって、あらためて都市のことを考えるようになった。

あらゆるものが変わったと言えば変わったが、土地をもっている人たちはいったん立ち退いても戻ってきて、住民構成は変わったところもあるが6割くらいの、かなりの部分残っている。都市の構成そのものは変わった。原爆被害をこの地区は逃れることができた。原爆後も倒壊しなかったため、被災民の受入先となり、住民が密集し、高齢化、車が入りにくいなどの問題が発生した。いっぽう、原爆で更地になった広島市の他地区は道路の拡張(100m道路)や水辺の公園化など都市整備を行なった。段原は残っていたために開発が滞っていたのでそれを仕切り直すという形で再開発が計画された。注目していたのは「道が変わる」ということで、それによって、住民の生活がどう変わるか、外で人が出会ったり話したりという何らかの人同士の交渉が、どんなふうに行っているのかということであった。

たとえば祭りの様子を見てみると、再開発の前の町では、道の真ん中で立ち話をして



図1 再開発前と後での道の変化

いる。聞き取りをしていると、買い物をして1, 2時間の立ち話になったりする。道でそれが起こっている。道と家の関係で言うと、以前の住宅はいわば長屋形式であった。道自体が狭いが、道と家との関係といっても、扉があいており、外に出てくるといっても中の様子がわかる。それが新しい町になって、環境から言えばグレードアップし、良くなったといえるし、大体においては感想として住民は満足している。かなりの部分成功なのだがその中で、以前の生活から失なわれた部分もある。とくに高齢者の方からは、隣の家でさえも訪ねにくくなったとよく聞いた。チャイムをならさないといけないし、用事がないと鳴らせないし、入っていくまでに玄関まへの空間、壁や鉄索、そして玄関というふうな幾重もゲートがある。内と外が通じていたものが、プロセスを何度かふまないと中に入れないような空間構成になった（写真1参照）。まちの区割りが変わるというだけでなく、町にかかわる記憶が原型を止めにくくなった。道をもとにしてできているものが新しい方へは移っていけないのではないかと。それは仮説でしかないが、道ということを都市の構造として考えると、そういうのをベースにして自分の住むまちや都市を理解し、記憶を蓄積していく。場所の記憶の組み直しを迫られる。道の変更によって以前の記憶がいったん失われるのではないかと。

そのなかであらためて都市の祭りを考えていった。瀬戸内沿岸の都市で、こどもが主役になる亥子祭りというもの。まちを練り歩く、基本的に町内の全戸をまわる。年に一度だが歩いて一軒一軒を回り、家の前でもちつきの儀式をしながら全戸をまわっていく。再開発後2年間ほど途絶えていたが、やらねばならないといっちはじまった。もと

もと、道具一式があり、朝4時くらいに集まって炊き出しをして準備が始まり、日中練り歩いて夕方におわって高齢者や大人の宴会が夜までつづく、という風であった。現在でもその形は汲んでいるものの、まず炊き出しはやらなくなった。早くから集まれない。それから道具をおく場所がない。そして、9時集合、17時解散というイベント的になっていた。祭りのもつ役割が変わってきていると言えるいっぽうで、それでも続けられていることに意味があるのではないか。あらたな都市の、まちの記憶を作り出すという役割を、こういう祭りはもっているのではないかと考えた。

都市の記憶ということで、そのまちについて共通に持たれている場所のイメージ、記憶というものがある。はっきりと詳細を覚えているわけではないが、電柱が何処にあってとか、そのようであるということが場所の連続性ということで、アイデンティティ、同じ場所であるということを支えている。あとで町と環境の無意識ということを話すのが、ふだんあまり町がどうなっているかは意識しておらず、考えていない。しかし自分の町であることを、確認するとか、わかるために、同一性ということが必要なのではないか。アイデンティティというのは心理学でつくられた概念で、人間の同一性、自分が何者であるか、わたしであるということ連続させるもとになっている自己概念。人間側の問題として提案された概念だが、場所のアイデンティティということベースを考えるべきではないかと思う。

祭りの場面で面白かったのは、向こう三軒両隣というのがよく話にのぼること。段原というのは人間づきあいの温かいところで、向こう三軒両隣はおたがいの台所に入って料理だってできると。そこでカメラマンが2年住んで取材して、定期的にたずね、番組をつくった。彼は隣の台所にはいるところを撮りたかった。でもなかなか映像として撮れることがなかった。祭りの日に、ようやくそのチャンスがあった。お母さんたちが台所へ入り、油は？とかいうシーンがあった。だから、(向こう三軒の実践が)残っているとは言えるけど、話にはのぼるが、実際におこる場面は稀なのではないか。

そう考えると、原風景ということばをつかって、その地区ないしはある世代を記憶として残していくような、町の典型的なシーンであるとか、典型的な出来事であるとか、それにかかわるエピソード、記憶ということを考えてきている。この町の語りということという、向こう三軒両隣というような付き合いの密接な話があるけど、そこで話されていることはすでになくなってきているのではないかと、考えさせられた。

少々話がとぶが、広島に於いて段原がどういう意味をもっているかということ話したい。広島的大部分が原爆で失われる中で、唯一戦前から町が残っていた。実際被爆者も多く残っていた。戦前の形が数多く残っていたが再開された、それを記憶の消去というなら、そうなのではないか。そのなかで、あらためてうかがいがってきたのは、平和公園の地区、そこはかつて密集した地区であったが、どの時点からということ調べきっていないが、もとあった町の形を復元しようとははじめている。ある人びと

が、現代的にCGでもとの町の再現を考えているが、そのまえに、通りと家の人びとの語りや資料から復元しようとしている。平和記念館のある慰霊碑がいまある風景は、かつてとまったくちがう。消去されたあとに新しく作られた。新しくできたということは、もとのものは再現できない形をとっている……場所にかんして不連続であると。そうならざるを得ないが、記念碑が、場所の記憶を消すことに寄与しているといえる。そのことから再開発について住民の生活がどうなったかをみてくのは、エスノグラフィの仕事だともうが、できる限り密着して再開発後の生活がどうなのかをきっちりみるという方向でわたしはやってきた。再開発自体が、広島平和記念公園はシンボリックな場所ではあるが、記憶を隠している、もとあった都市像を隠してカバーしているようにも見えてくる。こういうことをどういうことばで、どう表現できるのか？そこで消去ということば、精神分析でいう無意識、記憶を隠蔽する、抑圧するということばがうかんできた。精神分析は基本的に個人の精神をその深層において理解するものであるが、都市という対象にそういうアプローチの仕方が可能なのではないかと考えた。

2 アジア都市研究

アジアの都市研究、アジアの屋台にかかわる話にうつりたい。いくつかの町を見ることをとおして、キーワードとして「にぎわい」、都市計画の中での「賑わい」というものが注目される。社会科学の概念としては非常に曖昧で、定義することも難しいし、我々も明確にしきれていない。賑わいに注目する理由は、日本の都市の変容を考えていったときに、以前あったもので昭和40、50年代に急速に失われていったもの、事柄がある。それはたまたまではなく、かなりシステムティックになくなっている。広島の場合は違った理由で大きく変容したが、都市にみられる賑わいという姿が見えにくくなっている。それは都市計画の中ではっきり理由がある。近代都市計画の原点は都市の密度をいかに低めるか、それが環境改善になるという哲学にもとづく。密集地は環境がよくないと。ことばとしてはスラム街、住居環境として優れていない、ひとりあたりの居住空間は確保されていないし衛生上も良くないし、プライバシーもない劣悪さだと言われる。日本でとくに阪神淡路大震災以来問題になったことで、都市災害に耐えられない、一気に燃え上がってしまうという防災面からも密集地は望ましくないといわれる。ゆえに密度をいかに低めるか、ということは、機能を分化するということで、住宅地、商業地、とんでもかんでもひとつの地区でできるわけではない、分担つまり都市の利用の仕方を限定していくというのが近代都市計画の基本であった。ゾーニングするという計画となった。日本ではこの手法が採られ、戦後の復興政策でも取り上げられた。そこでの賑わいがなにを意味するのか。それは、路上で起こっていた人々の行き交う姿やイメージをなくす方向に都市計画がシステムティックになされたということだ。

アジアの都市では、密度を低下させるというのではない都市のあり方を考えることができるのではないか、そういう思考方向で7、8年やってきている。今日これから紹介するのはハノイである。

(挿入ビデオ：ハノイの中心地の道路をパレードして巡回するバイクの群衆)

ハノイの旧市町地のとくに路上をみていく際に、ストリート・ソーシャル・エコロジーということばを使っている。路上で展開する、複数の人びととモノ、出来事が織りなす相互連関する事象。路上で起こっている出来事は、見ていくと繰り返されている。その繰り返しのなかに何らかのパターンがあるし、ある地区の路上で起こることと、別のところで起こることが相互に連関し合っている、そのコンプレックスのまとまりをソーシャルエコロジーとしてみるということ。

そのなかで、ハノイの中心部を取材したビデオをみる。(細い路地沿いに食事などをする住民を撮影)

人類学的調査ではなく、都市研究としてみていくということでアーバンデザインのチームとして、路上に何があるのかとにかくすべてマッピングしようということをやった。ハノイの旧市町地の大きな2つの通りと、生活にかなり密着する路地、これらを取りあげて、モノと人と活動という3つの塊をみていこうと。それをソシオ・トープということばで表現している。ビオ・トープということばがあるが、それは生態系の最小単位、ある種全体系をもっているひとつの単位になぞらえて、社会的な生態系のなかで、非常に複雑に絡んではいるが、ひとつの最小限のユニットであるとみなせる塊。

たとえばバイクがそういうものの核をなすということがわかる。というのは工学部と研究していると「滞留」ということばを使うが、川の流れの中に杭を一本刺すとそこに渦ができて葉っぱとかが引っかけたりして流れが止まってしまう。通りというのは基本的には何も要素がなければ人も車も動いていく基本的にはそう見ることができる。ではなぜとまるのか、とまるのには理由があるのだろうというのが発想法である。あまりにも工学的発想法かもしれないが、わたしはまだ抵抗している。滞留ということば自体はあまりに機械的な表現であって、もっとひとつずつの事柄の性質を見分けなければいけないだろうと言うことで、それを「集まり」、なにかが集まっていると見る。すると、人がとまっているところでまた話をする。最小単位として、バイクと人がひとつの塊のユニットをなしていると見立てる。ビデオに出てきたように、もっと複雑だが、家族の食事の場面群と、このへんの塊が1つの単位をなしている(写真2参照)。この塊は隣の塊と関係があるかもしれないし、ないかも知れないし、でも路地の中でこういうことが起こっていて、大きな通りでは起っていないとすると、そういう社会生態系をここに見ることができるのではないか。そういう最小単位を見ていくという発想法。路上空間における「集まり」を、ある種の構成としてみていく。繰り返しのパターンをみていく。それはビオ・トープになぞらえると、生物多様性ということが生物の生態系全体の保持

ということに関してある役割を持っているのと同じように、社会的多様性がその都市のなかでの社会文化的な動きを維持していくことに依拠しているのではないか、その多様性を一方でみていきたい、というかそれを維持するような仕組みがあるのではないかという見方である。

ハノイの中心市街地の3つの通りを対象フィールドにして見てきた。それぞれがメインストリートといわれているが、商売のタイプが違う。生活空間に接している路地。滞留というモノ人活動がおこっているとみていくと、朝5時くらいから20時くらいまでの1日の中で密集してあるものが観察された密度をあらわしている。朝方に非常に集まっている。昼間にいったん少なくなってまた夕方出てくる。1日をとおして密度が高いエリアが通りのなかにある、それがどういう場所なのかをみていく。アジアの都市は高密度だが、密度は時間的・空間的に、あるリズムをもっている。空間的にはある場所に偏って密度が発生する。そのパターンから何が読み取れるかを考えた。すると、密度がずっと高いのは細い路地とおおきな通りの間の出入り口。小さなテーブルをおいた、茶屋空間だ。通りの人が朝食を食べたりする。それぞれの時間で食事が取れるような小さな設えのレストランというか路上店舗だ。誰が来ているのかというと、ここに住む人も使う。そこにずっと座っていることもあるし外から通りを通る人たちが来る。調査に於いても、このテーブルが役に立った。自己紹介のようなものが可能で、結構はやくその情報が伝わっていき、なかにはいっても怪しまれず、迎えられるという、たった1週間でそれが可能になった。茶屋の役割として外部との緩衝材となる。いきなり入らせない、ここでいったんとどまって、とどまるだけでなく相手との関係をはかりあう。そのこと自体はごく当たり前かもしれないが、ベトナムの場合はこれが非常に簡単にできている。小さなテーブル、お金をかけずにこうした場が作られているというのが、都市の仕掛け・仕組みとしては非常に賢明なやり方のひとつであると考ええる。

大きなタイトルになるが、そうした研究をとおしてみたいこうとしているのは、アジアの都市にかかわる都市生活の仕組みを再評価したいということ。それが日本の場合を見たらわかるように、システマティックに消えていくということがあるので。都市計画はそういう方向に進んでいくので、そうではない方法あるいは考え方を、いまだ仕組みが残っているアジアの都市をみていくなかで、再評価していく。それを現代の都市の中でどういかにさせるか。それをアジアナーバニズムということばで表わしている。アジアンとはあまりに大きなことばで問題だということを認識しながら、ある種の標語として使っている。屋台が出てきたのはその流れ。都市での生活のしかけ、仕組みのなかに、機能を分散させる、密度を下げるというのではない都市デザイン方法を見つけることができるのではないかということ。

これらはかなり都市計画よりの方法論であり、集約のしかたである。ともにリサーチをしながらわたしがしているのは、できる限り町や屋台や夜の市場をみてまわる観光客

の1人になりきること。訪ねてきた人がそうするような振る舞いに自分をおいている。そのなかで、台北市を例にすると、屋台はどう体験されるか？ビデオでとるのは必ずしもそれを捉えているとは思えない。実験的に、気の向くままに歩きながら写真を撮ってみた。自分をできる限り自然に近い感じで、市場のなかで自分の目に映ってきたものを写真におさめる。

ハノイの事情をみてきたなかで「集まり」には人間的秩序がある。台北の屋台もだが、バイクの駐車や商品の販売には、基本的に不法のものが多い。法律的には許可されていない。売っているもの、路駐のバイクなどは、都市計画の上で悩みの種。日本では駐輪自転車が問題なようにバイクが問題で、都市計画からはどう制御して否定していくかが都市計画の論理。秩序づけていくこと。でもそれはシンプルな秩序。それにたいして路上でおこっている、集まりに見られるのは、人間的秩序がある。ソシオ・トープというのは分析的にそれを明らかにしようとする。台北において写真に納めたものは、もっと、そんなに論理的なみかたでなくて、都市の体験の仕方によって都市をみなければいけないということ。分析者として都市を見る見方と、都市を遊ぶ=あの町に来る人がどう都市を体験するのか、そこに沿っていかないと都市の現象にならないのではないかと思悩んでいる。分析するという目的はいっぼうにありながら、都市の都市性、ロジックではないところの人間の体験の動きがあって、その体験の仕方によって見ていく方法がないだろうか？そこでベンヤミンのフラヌールがぴんときた。

屋台を歩くときに、定点観測・追跡調査をしてみた。一本の道に構えてうしろをついていってどう歩いてどこへ歩き出て行くのか。行動の流れを理解しようという環境心理学のひとつの手法。ある人はとても足早だった。それについていこうとすると、とても目立ってしまった。周囲から浮いた。なぜかという、その人はコンビニへ入っていった。屋台へ行く人は、何処へ行こうという目的をもっていない。われわれが目立ってしまったのは、そんな歩き方をしていなかったのだと思う。屋台を歩くときは、言ってみればふらふらしているのだと思う。ふらふらと表現していても、ちゃんと結構まっすぐ歩いている。ある呼吸やリズムがある。目的地だけに歩いていく人とは異質の歩き方、屋台を歩くときの歩き方、屋台ウォークと名付けたものがある。それがベンヤミンのいうところの遊歩的な徘徊というものに近いのではないかと。はっきり焦点をしぼっておらず、いろいろなものなかを行き漂う意識。でもはっきりした意識ではない、何処へ行こうとか何をしようとかではない、半分さめて、半分ぼんやり酪酊しているような、そんなふう屋台の空間にいるのではないか。もうひとつは、包まれる感覚。とくに台湾の食事が放つ湯気の立つ屋台の前をとおるとき、まつとき、作ってくれる屋台の主の動きや、灯籠の明かりとか……あまり空間が広く抜けてなくて自分が包まれる感覚があるのではないか。それは精神分析の考えでウィニコット (Winnicott, D. W.) という人が「Holding environment, 抱える (母親的) 環境」であるといったもの。赤ちゃんにとって

の大事な環境は何かという議論で、環境ということでは、こうした都市のありかたもホールディングで言えるであろう。台湾の場合座り屋台はあまりなく、福岡では比較的狭い屋台のなかで座る。形の上でも包まれており、中央に暖かい料理があり灯りや火があり、これが「包まれる」という表現に合っていて、そこに転がり込む。われわれにとって基本的に安心できる環境のありかたであろう。

もうひとつ、ベンヤミンは「都市が見る夢」ということを『パサージュ論』で言ったが……これはまさに都市が見る夢とっていいのではないか。夢がこういう体験だというのではなく、はっきり焦点づけられておらず、ぼんやりしているようで鮮明で、どこに行っているとか何をしているとかのストーリーがはっきりなくて、あるルートをとって始まりと終わりがある。そうした体験の様相は夢の様相といえるのではないか。夢は1人しか見られないけど、公共空間の中でともに見ることのできる夢といえるのではないか。そのように、アジアの都市をみて考えてきた。

3 都市の精神分析

もう1つの話題、都市の精神分析ということについてお話したい。台北やベトナムをみていくなかでも考えたことだが、同僚の北山修さんとか話をせずと関心のあることなのだが、まだわからないなとも思う。1960年代後半に環境心理学がはじまったその1つの拠点はNYだった。2002年に10ヶ月ほどニューヨーク市立大で客員教員をした。そして自分も分析をうけたいという希望もあり、北山さんの薦めでNYにたくさん分析家もいるからということであげてみた。英語で分析をうけた。分析家はユダヤ系の方でこれは後で私が広島出身者ということとつながることになった。あくまでわたしは精神分析を勉強するために、受ける側になってみた、経験としてやってみたいといい、紹介してもらって週2回分析的セッションをうけることになった。3ヶ月くらいたった頃からだんだんこれはセラピーだと心底思うようになった。自覚で言えば、自分がセラピーを受けなければならないとは思っていない。しかし分析を重ねていく中でセラピーということがわかったというか、そうになっていった。いわば「抵抗」というもの。じつは自分が持っている個人的な問題がないかのようにしていたが、それが出てきた。それが抵抗と言われる。分析を受けている、そのこと自体にわたしは抗っていた。精神分析にのせられるものと張り合っていた。自分がそう簡単にみられるものかとか、自分はいま起こっていることは理解できているとか。そうしたプロセスのなかで、たった45分の分析なのだが、終わってすぐに大学に帰って何かやろうという気にならない。分析家のオフィスを出て地下鉄で通っていたが、セントラルパークを横切ったり、界限をまわっていると1時間、2時間たっている。家にも大学にも行かない、NYを歩き回って目的なく地下鉄に乗り、ふと趣くまに町を見て歩く体験をした。2002年3月くら

いのことで、9.11 から半年後くらい。まだまだ生々しく緊張感があった。1周年をさか
いかなり急激に変わったと思う。それまでのNYは色々な形で静かであった。個人で
言う、日本から訪問者があってグランドゼロへ案内すること、観光案内のように訪れ
ることのできない張りつめた感じがあった。わたしはNYに着いて1週間目に行ったが、
それからは行こうと思えなかった。が、あるときふらふらついでにグランドゼロに着い
た。グランドゼロの壁を見ることのできるスポットができ、ライトアップされている場
面に出くわした。そのとき、これは写真に撮らなければと思った。そのころからNYの
町の写真を撮ろうと思った。

最初の広島の話をも伏線として……自分と父親のうつっている写真。原点、原風景、
「原」でいえば原爆の場所。自分の子ども時代の体験ということも分析セッションのな
かで出てくる。精神分析でいえば常道で、親の話から子ども時代の話に自然に入ってい
く。わたしが育った町、その路地で子ども時代のかかなりの部分を過ごした。その路地
の記憶があるし、子どもの環境を研究していくなかでテーマとしてよくでてくるテーマ
だが、子どもはどのような場所を遊び場にしたいか。必ずしもきれいなところではない。
大人から言えば経済的価値のない、むしろ困った場所であり、影の部分だが子どもはそ
ういうところを好んで秘密基地を作ったりする。捨て犬や捨て猫を飼ったりするのもこ
ういうところ。子どもの遊びという意味で、いま町の中にこういうところがない。経済
的にも。いまは犯罪や危険とかさねられて排除されていく方向になっている。でも子ど
もはこういう場所が好き。

ここでまた無意識ということばを使うと、無意識であらわされることは、意識化さ
れていない、おとなのなかにある子ども性、子ども時代の記憶ともいえる。ただし大人
はそれを制御して抑え込む。もっと論理的にそれを制御しようとする働きがある。意識
化する。一方子どもはアクティング・アウト、行動として示す。子どもが遊んでいると
ころが、都市のなかの無意識の部分といえるのではないか。

写真ということでは、いくつか気になる場面、シーンがNYであった。分析家の
オフィスの近くの駅で、地上がちらっと見える。地下だと言うことがわかるような地下
道。一番前の車両に窓があって、一番前にたつと、トンネルの中が見える。興味がそ
られる。上に自転車が通る。地下道から上にあがっていく感覚が非常に鮮明である。光、
摩天楼、地下から出て行ったときに引っ張られる力があるように感じた。五番街を歩く
ことが、わたしにとっての暫くの課題だった。なんでそんな苦勞するかというと、ベト
ナムでは横切るのに3日はかかった。NYの場合もっと、半年くらいかかった。五番街
は毎日大学へ行く経路としてふつうにとおるが、威圧されるという感覚がつかま
とった。その感覚を写真に納めたかった。むこうからやってくる人たちがいて、いつ
のまにか体が胸をはるように歩いている、体がそう反応している。自分の体に緊張をも
って歩かないと気圧されてしまうような、そういう通りだった。ある時、これだ！と思っ

た光景のひとつに、光っている、目が覚める……五番街で自分の体がぴんとしてなければいけない、別の意味では、目覚めてなければならない、と環境が自分にむけて投げかけていると感じた。NYで写真をとってくるとき、光というのがNYのストリートのなかの何か大事なことなんだと。まさに日本語の「光景」という、光るということ……いっぼうでわたしは夢のFWというのをやっている。夢をFWできるかどうか、ベンヤミンへの興味から、夢的体験というか、夢的体験とはどういう体験なのだろうか、それは目覚めているときの環境の体験とどう違うのか。ということを見ていこうとして、夢を見ているときにそれがどういう世界で、たとえば環境体験として見るとどう環境体験なのか、というのを理解したい。夢をFWしようと10年くらいやってきているが、できたことはない。夢のFWができるとしたら、朝起きて、さっきあった夢は何だったかなと書く。夢について書くのはフィールドノートを書くのとあまり変わらない。むしろ、目覚めてからが夢のFWなのではないかと思っている。ひとつ大きく違うのは、夢の中には光がない。光がない。目覚めているときには光がある。それは物理的意味合いなのか、まだうまく言えないが、夢の中には光がない。写真を撮るということは、NYではフィルムの写真を撮っていた。それはひとつこだわりがあって、光の痕跡を、光を残すという、フィルムでなければいけないという思いが強かった。

4 まとめ

都市の精神分析ということを考えるようになった道のりとしては、広島市の再開発の中で、都市が変わっていくと言うことで、それが住民にとってはどういうことなのかを理解したかった。なぜ、町をこういうふうに変えていくのだろうか。ロジックではわからないことを理解したい。都市の精神分析とは、精神というからには人間を相手にしている。しかしクライアントということでは、都市もクライアントになるのではないか、都市を臨床的に見ていく。都市を臨床的に理解する。そのときに、1つは場所に対するつながりというところからみていく、自分がつながっていると思われるような場所、それは物理的な場所ではなくて、自分の家みたいなもの、持ち物もそう、自分の一部みたいなもの、精神ということでは、人間の心という言い方をするが、自分が所属している、つながっていると感じるような環境も自分の一部だとするならば、自分の住んでいる家、座っている椅子だとか、そういう近い領域からもう少し広がっていったときに、町という単位になったときに、町も人間の精神の深いところに繋がっているとすれば、そういう場所を分析することも可能ではないか。人間の心理の深層に簡単にアクセスできないように、この領域も簡単に入り込めない。どうやってそれを見るようにするか、ということで精神分析の考え方が役に立つと思う。一番大きいのは、「自由連想」という方法だと思う。精神分析というのは、分析するのではなくて……分

析という言葉がついているから、夢を見たら夢を克明に分析されるのかなと思ってしまいが、だってフロイトの本を読むとついそう思うってしまうけれど、そうではなく、できる限りフリーに思いつくことを話すということが、精神分析であると自分なりに思う。それが実はむづかしい。なかなかできない。町を見ていくときにも、環境を見ていくときにも、ハノイでもそうだが、ある枠組みで、ある目的でみると研究者はなかなか枠から外れられなくなってしまう。NYの体験でもハノイの屋台を歩くときでも、できるだけ自分をフリーにしようと思って見ていこうとしたときに、ひとつの方法として自由連想があった。精神分析は自由連想を、分析家とクライアントの間の言葉を介したインタラクティブによって行なう。都市の精神分析という場合は、ベンヤミンの言う遊歩的な関わりかたが1つの方法になるのではないか。町を気ままに歩く中で出会ってくるもの、場所との接触面を手がかりにして、その層をだんだんに掘り起こしていくという作業ができるのではないか。それは個人的な記憶というよりは、場所に関して言えば、これという集合的記憶にかかわっているであろうと、言葉として原風景というならば、集合的記憶と言えるであろう。それが失われるということが、どういうことなのか、あらためて問い直すことができるのではないか。

もう1つの場所の無意識にアプローチする道は、子どもの体験。自分自身の子ども時代を振り返るのも1つの方法だし、今いる子どもたちの場所とのかかわり方を見ていくのもそうだ。子どもたちというのは都市の無意識のある部分、行動の中で表現し直してくれているのではないか、そういうエージェントになるのではないか。子どもという媒体によって都市の無意識が露になる。

ストリートとの関係で、道をどのように理解するかということで、今日の話をもとめると、都市の道というのは環境とのエンカウンター＝出会いの構造である。出会っていくというときの、出会い方を偶然ではなく仕組んでいる基本構造が道であると見ることができる。都市計画の人たちからいえばマクロに決定されている。都市計画の人たちと仕事を始めて見えてきたことだが、マクロな構造がある。しかし心理学からいえば、それが現象として現れてくるのは、あくまで個人の次元で、具体的には歩く、通る、そこで何かをするということではしか現象は出てこないのだ。だから、マクロに構造化されている側面と、個人の個々のレベルでの、行為ということでの現象化、その2つが合わさっている。

もう1つは物質的な痕跡、道というのはモノであるわけで、モノとしてそこに残っているし、堆積される。その堆積されたものというのは社会化された記憶と言えるであろう。

最後に、都市の精神分析とは何をしていくことなのか。なにを目指すのか、どういう方法か。それは自由連想を主軸とする。ただし精神分析の自由連想とはちがって環境とのトランザクションにおいて構造化される。自分たちの環境のなかに出て、出会うとい

うことを通して、自由連想的な関わりを持つ。都市の見る夢というベンヤミンの言葉を借りれば、都市の見る夢のような、都市の無意識ということを解説していく。都市の集合的な体験を批判的に解釈する。

広島のことと言うと段原の再開発は政治的に決定されたプロセスだが、あえて精神分析からみるならば、広島の無意識を消す作業のようにみえる。原爆という体験を、広島は平和公園や記念碑、原爆ドームとして集約して整理して、きれいにしている。そしてその他は消去している。

それよりももっとストリートにあった原爆の痕跡が段原の古い町にはあったのだが、それは残したくないという、見たくないという無意識が働いているのではないかと。そういうかたちで消すということは、場所の連続性からすると、連続性を断ち切ることになる。今考えているのはそれを復活させる必要があるだろうということ。その方法はまだわからないが、子どもの体験、無意識と言えること、祭りの中で起こってくる無意識的側面とか。広島には祭りがない。都市の祭りがなく、あるのはフラワーフェスティバルという非常に管理された祭りではないもの。祭りがないことと、都市の記憶がないことは結びついているのではないか。慰霊碑では慰霊祭を毎年やっている。それは意味のある行為だが、一方でこれを押し隠しているわけだ。平和公園に置き換えたという、replace であり、場所の displace と表裏一体である。

質疑応答

関根：都市という巨大な場所をどのようにFWできるのか、という人類学者にとって非常にむつかしくて大きな課題である。都市人類学という名前はあるが祭祀研究が中心だった。ご発表はその意味で、いったいどうやって大都市を人類学者が研究できるのか、と言うことについて非常に示唆的だったと思う。わたし自身が考えていることと重なるところ、目を開かされたところが沢山あった。これまでここで議論してきたことと重なるポイントがおおくて、ある意味明確になってきたとも思う。一応の最終回に本当にふさわしいゲストスピーカーを迎えられたと思う。

棚橋：ベンヤミンについてはあとでガチンコがあるということなので。都市がクライアントとしてあるというのは、擬人化した表現ではなく、まさに都市がクライアントだというつもりでおっしゃったと受け止めたがそれでよろしいでしょうか。質問というよりコメントになるが、話をうかがいながら自分の調査している島を思い浮かべた。それは、人が主体になって土地を所有したり、でかい都市はないけれども、人が都市の空間に住まうとか所有するという言い方を実はあまりしない。場所と人を比べたときに、場所のほうが人をもつ、という考えかたのほうが割合強くあったりする。個人の家とかもお屋敷の土地であったり、それが中心になっていて、ある場面で、都市とか場所の記憶

の一部に人がかかわってくる。島の世界とNYとでは、形としてはまさに違う空間としてあるが、都市の記憶の中に人があって、人の集合的記憶の蓄積が都市なのではなく、むしろ都市のパーツとして、空間とか場所のほうに強い力関係のありかがあって、人の存在があるという印象を持った。ポリネシアの島の世界だと所有格で「わたしの」にも二通りくらいあって、わたしと相手の力関係でも、相手が強いばあいのわたし、とわたしが強い場合があって。そんなまったく異なる現象を思い浮かべながら伺っていた。都市がクライアントであるというのはまさに直截的に、メタファーではなくストレートな表現なのだろうと思って伺った次第だ。

南：擬人化ではないということかというと、あえて断定して、クライアントであるといいたいです。でも心理学の側では逆にそれがむつかしい。とくに精神分析でいう精神がどこにあるのかというとき、人間のなかにあり、人間が精神であり、そこに心的活動という、考えたり思い出したりという場がある。それをベースに科学として心理学を組み立ててきているので、都市が考えている、記憶するというふうの主語にもってくるのができない。いまぎりぎり言っているのは、今日も出てきた、Collective という言い方である。Collective Memory が何なのかはまだ心理学では苦しい。集合的記憶はどこにあるのか？といったときに「人びとの」となる。おっしゃった「場所が記憶なのだ」というのも、心理学の世界ではまだ向こう岸にあるという感じである。

小馬：岸田秀みたいに、精神分析学というのはもともと個人心理学として発達したのではなくて、集団も意思を持つとあって、個人の心理を説明するのに集団の心理を使った、彼みみたいな立場はどうお考えですか。

南：集団にかんしていうと、社会的表象とか社会科学系からでた考えかもしれないが、集団をベースにおくということと考えれば、ありうる立場ではないか。

小馬：彼は「唯幻論」というのだけど。

南：精神分析でもユングは集合的無意識を言って、神話の領域というか、集団で考える。場所と集団という、都市の場合は重ならない。場所の記憶といったとき、村落ではそこに長く住んでいる集団があればたぶん重なっている。都市の記憶を場所といったときに、それが重ならないのがむつかしいところかもしれない。

小馬：ビオトープというのは絶対に干渉しないという意味ですよ。それに対するソシオトープは、さまざまな社会的な活動ができると、それを保障するものだとおっしゃった。するとそこには、南さんがなさる都市計画というのと逆の考え方がある。つまり干渉しないで、理性的に人びとが作っていくような、社交的なありかたの輪を認めていこうとするわけですね。そのことは柵橋さんの議論と関係すると思う、場というだけでなく、ある意味では法と捉みたいなのがある。場の中にはそこでしか成り立たないかも知れない、ある意味で非合法の、法律によって保障されているものではない。しかし、それがないと成り立たないような、生き甲斐を感じないような捉みたいなのがある。

ある。今日の話をおもしろく聞いたのは、ここには法、神、掟というものがあるというか。掟を持っている主体としての集まりがあるかどうか。NYではなくなってしまっているかもしれない。この議論の射程はもう少し大きくて、たとえば植民地化されるという、巨大な力が色んなものをインコーポレートしていくときに、否応なくそれに服さざるを得ない状況というのが色々ある。都市化とか植民地化とかもそうですね。その場合、ユニバーサルな概念で、都市の場合ゾーニングという概念があるが、人間のあり方とすると、人間という概念自体がそうかもしれないし、民主主義という観念もそうであろうし、個人という概念もそうかもしれない。それはアフリカとか、わたしたち人類学者が活動の場とするところに全部押しつけてしまう。それでやっていくと解決能力がなくなってしまって、ルワンダやブルンジみたいなことが起きる。ところが、逆に昔のやりかたを放棄していないことによって、そういう紛争を局地的に全部解決して問題起こさないようにするやり方がある。それは明らかに掟であって、掟を守れば、守れたのは、たとえばケニアがそうなのですが、チーフ制という非常にインチキなものを植民地が作ったのだが、逆にそれによって権力をとったやつがあいまいなことをやっていたものだから、いい加減なことによって、地域の掟を守っていく集団と、ある妥協的な関係ができてきた。それによって自分たちがいろいろなものに対処していく力を残していった。日本の場合どこでも明治時代同じ様な状況があったが全部潰されていった。何処の都市も同じように、掟的な力をなくしてしまった。いま話を聞いていると、アジアにかぎらずアフリカの町でも何処でも、ある種の理性的な場所を確保していくと同時にまたひとつのものを受け入れていく。それで今日お話の、通りと路地の接点のようところで、ある種の間関係を調整するようなメカニズムがまだ残されている。それがとても面白かった。勝手な解釈ですが、今日のお話は非常に射程が広いものだったと感じた。

阿部：いまの関連で質問したい。段原町を東南アジアの都市と比較して、広島ということで無意識ということを書かれたわけだが、しかし段原町のようなことは日本各地で起きている。すると、東南アジアの都市で今日紹介されたようなことが起こり得て、日本でむつかしいというのは、どう説明なさるか。

南：現在という軸で見たときに、総合的な比較はできていないので屋台についてのみ言うと、台湾、韓国、日本と。ベトナムの場合は屋台という形態そのものが違うけれども、法律の取り扱いは台湾でも規制されてきている。日本は道路交通法で法律的には公共の道路を占拠するということになるので全滅している。さきほど小馬先生がおっしゃった、法律と掟と、というレベルでどういうふうに残っているかというなら、日本の場合法律の規制力が徹底している。韓国では条例にしてソウルとかは屋台設置ブースや、法の中におさめていっている。それでもはみだしているものはかなりある。法律への反応の仕方という部分と、それをさらに超えてかいくぐってやっている部分の違いと

いうことで。それから、3ヶ月ほど前に中国で、今日のようなアジアの都市という話をしたときに、環境心理学の大家が、これらソシオトープと呼んだ現象を何が説明をするのかについて一言「それは経済でしょ」と言われた。中国も変わりますよ、と。わたしは今のところちゃんとそれを見る術をもっていない。経済発展ということでベトナムのハノイの路地にしろ、ベトナムの経済発展が今の調子で続いたら10年後には消失しているでしょと言われた。わたしはそうでもないだろうなと思う。さっき言ったような、かいくぐるやりかたはあるし、流入人口というか、都市と農村というか、ハノイでは誰が店を開いているのかといえば都市近郊の農村部から大量の人が2、3時間自転車通勤で商品を運び込んだりしている。それがどう変わるかにもよるだろう。近郊農村からのそういうのは日本ではないでしょう。

小馬：シンガポールなどでは一箇所に屋台を集めて、囲い込まれてきている。ケニアのナイロビでも町の中心部で屋台が広がっているが、市の警察隊と戦争のように争っている。何年かまえには蜂起があって何人か殺された。でもおっしゃるように農村から流れ込む人口圧が大きいので、どんなに規制してもしきれなくて溢れている。いっぽうで国際会議なんかを1970年代にはナイロビは国連関係の会議を何度も開催してきたので、そういう舞台にもう一度戻そうという方針もあって、その両方がぶつかっていて非常に面白い。やはり中国の先生がおっしゃるように基本的に経済の問題かもしれない。速度の問題と、周囲の流入する人口圧と、いろいろな表現があるだろうけど決してアジアだけの問題ではない。

南：そうですね。経済ということで言うと、経済のプロセスがあって日本は今どこにいるかといえば、それが壊滅した状態という段階で、われわれがこういう研究をしているのは日本の都市という状況に対して危機感を持っているからですよ。犯罪とか。都市の空洞化が日本で起こるのかということ10年前は疑っていたと思うが、アメリカとは違ったかたちで、都市の中心部がさびれてくるといふ。

小馬：アメリカン・システムをとってしまったからですよ。ロンドンでもどこでも、町は魅力的だけど、日本はどこもシャッター商店町みたいになっている。大資本が得るようにつくられている、経済というのを人類学者は無視できない。

鈴木：都市の精神分析についてわからないところをおうかがいしたい。わたしは人口200万くらいのアビジャンという都市を10年ほどFWしている。都市とは物質的な空間だと思っている。色んな人が住んでいて、意味づけして、色んな都市が、1つの空間のなかにあるんだと思った。わたしが見るアビジャンと、ストリートボーイが見るアビジャンと、大統領が見るアビジャンと色々あると。ところが、今日の発表では都市に意識があり、無意識があり、それが立体的なもので、それを精神分析すると。その手法として自由連想として一種のぶらぶらするっていうことでした。見る視点によって都市の姿が違ふとわたしは思ったのだが、ちがうわけですよ。わたしは人類学のフィー

ルドワーカーとして人間の視点からものをみますから、いろんな視点があり得る。とすれば精神分析者が自由連想でみた都市とは、その精神分析者が目で見た都市の姿であろうと思ったんだが。でもアナロジーではなくて実体として、主体的に都市が意識をもっていてクライアントになりうると……そのへんが今ひとつ把握しきれない。

南：そうですね、たしかにそこは正直苦しいです。視点の違いということで、ストリートの人類学からすると、同じストリートのなかに棲み分けしているというか、生活の背景も違う、どう理解するかという方向性があると思う。そこが場所と言うところに、都市に実体として無意識があるという言い方はたぶん正確ではなくて、人間と一体になったときに、と条件を加えておかなければならない。いまわたしが言えるぎりぎりは、自己環境系ということばを使うが、個人のレベルでいえば自分と自分の持ち物というのはひとつのセットになっていて、わたしでもあり、わたしの記憶でもある。とするとわたしという精神の領域はどこか頭の中に収まっているというのではなく、これもシステムの一部であると見ることができるであろうということです。先ほど鳥の話ではわかりやすかったが、collective という集合的に世代をこえて住み続けていく個人ではない都市住民がいて、その人たちと場所が、個人に関しても言えるような自己環境系をなしているのではないか。記念碑でいえばその記憶を継承しているし、思い出すだけではない感情的反応も含めて伝承されている。原爆ドームなどのように、ここは厳粛な場所であるという。住んでいる人にも訪問者にとっても、というそのへんを微細に見分けていくことが必要になってくる。そのへんの違いがないのかといえばある、厳然としてある。それをいま考えられるところでは、住民ではない自分がアナリストになれるのかということだ。外からきた人間が分析し、その町をみてこうとか、町を解放するのかとかそんなこと言えるのかとも思う。しかしそれを言うてしまうと精神分析が成り立たなくなる。分析をされる人との長い関わりを通して、その人の無意識をある程度インターサブジェクティブに立ち入ることができるならば、その解釈というのが妥当な解釈に成り得るのではないか。

鈴木：たとえば南さんは広島を分析なさった。そこにはすでに自分の原風景がある。しかしNYを分析した、そこは完全にビジターである。WASPがいて、ギャングが居て、いろんな住民がごちゃごちゃになっていて、それは個人を精神分析するのとはかなり幅が違うのではないかと思った。都市の精神分析って論理的にはすごく面白かった。ただNYの写真を見ていてこれだけのバラエティをもったNYの都市を1人の人間が見るというのはどういう意味なのかと、それが質問のきっかけです。

棚橋：1920年代になりますが、シカゴのアーバン・エコロジーもそうだったのだけど。ストリートコーナースサイエティも場所に目を向けた。遊歩ではなく定点観測型というか。ウォーナーなんかはさきほどのオセアニア的言い方はしないが、場所になにか主導権があって、長い間都市に居住しているからどうかという経験とか、ビジターかど

うか関係なくクライアントに相対することができるという前提でやっている気がする。その多様性つまり Multitude の人側からみたら大変だけど、オーソドックスだけどシカゴのアーバンエコロジー的な形、つまり場ですよ。生態学的な思考だってある特定の場を共在共生しているって場に注目して考えている。バイオトープそのものも Multitude の世界だから。だからわたしは、南さんは十分都市をクライアントにできるだろうと思った。

南：そう言ういただけると助かります。場所に自分がとらわれると。話しわすれてしまったのですが、『ナジャ』という小説のごく最初のところに、Who am I からはじまって、わたしとはわたしをハントしたもの、とある。どっちが主語なのかということです。小説そのものがそれをテーマにしている人間論だが、この著者はだれなのか、ナジャという女性とはだれかという。わたしとはわたしをハントしているものだ、っていう。常にそうは思わないが、ある種の場所体験が場所に自分が引っ張って行かれると。自分という自己の資格はあまり働いてなくて、逆に言うとベンヤミンの読み方になるのかとも思うが……ベンヤミン個人の体験を言ってるわけではなくて、パサージュという空間であるし……。ベンヤミンの「歴史の天使」に連なるのだろう。collective という言い方をすることと場所に寧ろ自分が引っ張られる場所の力、場所の力をどう感知できるかというこちらの感度にかかっているかもしれない。

阿部：今の話と理論的にどう絡むかわからないが、もしかしたら参考になるかも知れない話。東アフリカで、ある男が牢屋に長く閉じこめられて、釈放されて戻ってくる。そして村に帰ってきて子どもに牢屋があったところのハルトゥーンという名前をつける。なぜかというハルトゥーンがとりついて離れないと。その霊を祓うために自分の子どもに名前をつけたという話がある。さきほど自己環境系とおっしゃった、それは学問的な概念的歴史のなかからでてきたわけだが、人類学の中でいろんな人格観、その場合場所はあきらかに主体ですね。というような例がある。それを報告している人類学者がいうには、経験のとらえかたが近代的心理学とは違い、個的な主体があってそれがいろいろ経験するのだというのではなく、経験自体がある種の主体だと。場も含めてね。自分が居る場あるのではなく、場と自分との関係がある種の主体であると。

関根：時間が限られているので。鈴木さん、棚橋さんの出された問題は重要な問題で、ベンヤミンのフラヌールを深く検討されてきた近森さんは先ほどのような議論にどう絡まれますか。

近森：場所に引っ張って行かれる点はまさにそうだと思っています。都市がクライアントと書かれていて、都市を歩いている自分がまさにクライアントで都市に分析されるということがありそう。今日印象的だったのは、NY でセラピーに通われて、自分のなかになにかあるなと思われたとき、町をうろうろしたと、それが印象深かった。そこで何が起こっていたか。自分の輪郭がとんでしまっているときに、また自分の輪郭をた

てなおさなければならぬ。家に帰らずに都市をうろうろするというつまり都市に癒されているというか。それが今の話と関連して、自分の博士論文の内容とかぶっているところがあるので紹介からさせてもらいたい。社会学の分野でベンヤミンの遊歩者論をやっているが、「観察者としての遊歩者」と、「陶醉者としての遊歩者」という軸をたてた。それまでに社会学でも遊歩者はよくひかれていたが、それはベンヤミンの「観察者としての遊歩者」だけに光をあてているのではないか。自分と主体と対象との間に距離を置いておいて、思考的な関係の中で対象を知覚する。パノラミックな知覚ですね。相手のみかけから属性を判断するとか、距離をおいている。なかば特権的な存在としての都市の観察者の面ばかりが強調されてきた。しかし陶醉者としての側面もたくさん『パサージュ論』にも書いている。対象との距離がむしろなくなって、融合的というか浸透し合う経験ですよ。その文脈で、ベンヤミンの思考の系譜のなかで、彼自身マルセイユをうろうろしたりしてハシッシの陶醉経験とか、子どもの知覚、類似関係をみつけるだとかミメシス的な能力、そういうことも確実に結びついている。そのように観察者として考えられていたのを、むしろ陶醉者として解釈してみるとどうなのか、というのがわたしの博論の内容であった。そこで今日のひとつのキーワードにもなっている夢の扱いに困った。夢は非常にキャッチーで魅力的だが危険な側面もあって誤解されやすい。というのも彼の夢にはふたつの文脈が混じっている。ひとつはマルクス主義的文脈で、夢=幻像・ファンタスマゴリとしての夢。もうひとつはシュールレアリズムからの文脈で、断片的イメージとしての夢と名付けているのだが、ふたつの文脈でだいぶニュアンスが違う。ファンタスマゴリとしての夢は、資本主義が人びとを取り込んで、見せる幻像、虚偽とかイデオロギーに近いような夢で、19世紀バリのパサージュやパノラマとかデパート、そのなかの商品とか幻像に騙されているというイメージでベンヤミンはどちらかというとながてな評価をしていて否定的で覚醒しなければいけないといっている。もうひとつのシュールレアリズム系の文脈でいく断片的イメージとしての夢とは、ベンヤミンはむしろポジティブな評価を与えているのではないか。人をだますよりも、ある種の真実を見させる、現実の別の可能性を垣間見させるイメージで、ブルトンやアラゴンの夢です。大きく分けてふたつの文脈がある。たんなるコメントです。

関根：ご回答はすみませんちょっとあとにさせていただいて、もうひとつ勝手にちょっとコメントお願いしたいのは、クラインシュミット先生。少しヨーロッパの視点からコメントいかがでしょうか。

クラインシュミット：アジアのアーバニズムを聞いていて、ヨーロッパと似ているところがあると感じた。たとえば南欧は建物は違うが、そういう滞留的なものはあると思う。ストリートのなかで話す人、座っている人。そういう例がある、が北欧は別です。寒いところで座れないから。アジアのアーバニズムは何がちがうのか、それがひとつの質問。それから、NYはひとつの都市なのか？というよりはたくさんの村ではないか、

というのがわたしの考え。北米の都市概念は別のように思う。あそこの都市概念は、たくさん建物の建物、それだけ。とするとそんな都市の概念とアジアを比べて見えてくることがあるだろう。村の集合のような都市と都市を分けるものについて関心がある。

関根：2005年にベルリンでクラインシュミットさんにお会いしたら、ベルリンは田舎の集まりだとおっしゃった。ベルリンは大都市だから、わたしには意味がよくわからなかった。クラインシュミットさんは別のところのご出身で、そこは都市だとおっしゃる。その違いがはっきりとクラインシュミットさんのなかにある。そこがわたしも知りたい。ベルリンとNYは似ているわけで、今のような指摘がなされたと思う。補足として。

南：NYはひとつの都市なのかという点では、エスノグラフィックにはたくさん村であると思う。8ヶ月住んでいたのはクイーンズ州というマンハッタンから橋を隔てたところで、ストリートひとつ超えれば違うエスニックグループが住んでいる。あらゆる民族が住んでいると言われるところでエスノグラフィックにはたくさん膨大な村の集積であると思う。わたしが見ていきたいと思う都市で言うと、ある部分イメージなのかもしれない。I love New Yorkというたくさんステッカーが出てそう語られるNY。都市というのはナラティブのなかにしかないのかもしれない。そこでいくとNYはかなり強固なイメージと神話を持っている。その意味で、1つのNY=The NYが町の中に溢れている。プレゼンテーションということで、「都市はクライアントなのか」という議論でいうと、都市自身が自己をプレゼントしている。町を歩いているとたくさんNYが出されていて、それはばらばらではなくて、あるNY像なのではないかと思っている。でもそれは先ほどのファンタスマゴリといったほうがいいのかも。生活の実態でいえばたくさん村。

もう1つは、マンハッタンとブルックリン、ブロンクス、クイーンズというエリアでの違いがあるので、今日お話ししているのは大部分マンハッタンです。地理学的にも民族的にもたくさんものが混じっている。それと『錯乱のNY』（コールハース、R）では、いまのマンハッタンがどうしてあんなったかを分析している。すごくシンプルに言えば、ファンタスマゴリ論に近いのだが、コニーアイランドに巨大な遊園地ができた。それが火事で消失してしまい再現されなかった。逆にマンハッタンが、巨大でかつてのコニーアイランドになった。非常に幻想をさそい欲望を喚起する都市像が、マンハッタン全体に拡散したと読み解きしている建築家の論です。そこにわたしの都市の精神分析でみようとしている対象があるように思う。幻像といえば幻像で、でもかなり人びとに持たれているイリュージョンであると思う。

アジアンアーバニズムはなにが違うのかという点、これも毎回苦しいところだが、オーダーをどうとらえるかという基本的な観念が違うと思う。福岡の屋台がよい事例だが、規制をかける方法といったとき生き残る方法、ある種の共通ルールを持たないと生

き残れない。それはヨーロッパ的感性から見るとディスオーダーに見えるものが、アジアンといま呼んでいるが、それはアフリカにもあるかもしれないものが、ディスオーダーでなくヒューマンリーオーダーとして見ていけるというのが残っているのではないか、それがいまディフェンドしたい立場です。

関根：まだまだ議論したいが、最後に一言だけ。わたしは今日感銘うけたのは色々あるなかで絞るとすると、広島平和記念公園が、リプレイスの姿をとりながらそれはディスプレイなのだという指摘です。というのも、まもなく刊行される『民博通信』116号の特集に「二重に隠される」と書きましたことと、おしゃったことと重なっていると理解して、わたし自身確認できた思いがした。その点が重要なんだなと思った。どう考えているかという、これはまだ未熟な概念なんだが、ローカリティーをふたつにわけて、「勝利するローカリティー」と「敗北したローカリティー」と分けて考えている。近代化、グローバル化の進展で分けることが重要だと少し前から言っているのだが、その概念を使うと、「二重に消される」とか、「リプレイスがディスプレイである」というのがわりとよく説明できる。わたしが考えていたところの「敗北するローカリティー」というのを「路地的ななにかの消失」と語っていただいたのかなと。これはわたしが勝手に納得したことですが。ほんとうにどうもありがとうございました。

付 記

本報告は、2006年度民博共同研究「ストリートの人類学」最終回（2007年2月23日に国立民族学博物館第6セミナー室）として行われた発表内容に基づく。ほぼ、当日の逐語録を再録しており、事実関係などについて若干の修正と加筆を行なった。逐語録の作成にあたっては、日本学術振興会特別研究員（日本女子大学）の内藤順子氏に全面的に協力いただいた。



写真1 再開前と後での家と道との関係変化：玄関アプローチの距離感



写真2 路上の小さな社会生態系



写真3 地下鉄の光景

